

---

# 半人半妖とテンプレチートと魔法少女な世界

天叢雲

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

半人半妖とテンプレチートと魔法少女な世界

### 【Nコード】

N9642Z

### 【作者名】

天叢雲

### 【あらすじ】

親友だった男に裏切られ、全てを奪われて殺された。

転生したが、その先にも裏切った男が現れ、また小さくも大きな幸せを奪われた。

そんな男が行く道は・・・。

タイトル変えました。タイトル詐欺とか言われたから。

## 序章第一幕（前書き）

最近のテンプレ転生者と前世に殺された転生者が織り成す物語です。

テンプレ転生者が敵、殺された転生者が主人公になります。

## 序章 第一幕

俺は全てを奪われた。

前世で親友だった男に裏切られ、殺された。

不憫に思ったカミサマが転生をさせてくれたが、俺が願ったのは  
“何があっても裏切らない相棒が欲しい”。

二次小説お馴染みのチートな能力をもらって無双＋ハーレム作り  
とかはしたくない。

カミサマに何度も聞かれたが、“何があっても裏切らない相棒”  
しか欲しい特典はなかった。

力をもらうにしても、デメリットを消してまで手に入れたいとは思わない。

巷でテンプレチートと呼ばれる“無限の剣製”や“王の財宝”などの『Fate』の能力。

“写輪眼”やら“直死の魔眼”やら“複写眼”など魔眼を欲する  
転生者もいるだろう。

苦勞もせず力を手に入れば溺れるだろうから前世でも欲しい  
と願ったことはない。

だが、その物語のキャラクターとは会って話をしてみたいという  
欲望はある。

特に、絶望の崖っぷちで生きてきたキャラクターと話がしたい。どうしたら、あんなに真っ直ぐに生きれるのかとか、色々。

前世でどこを間違えたのか、俺は学校の嫌われ者になり、親友は学校の人気者になっていた。

最初は目立たない、普通の学生一人だったのにどうしてこうなったのだろうか……。

殺される寸前、親友だった奴は最後にこう言った。

『俺が更に人気者になるために死んでくれ。親友だろ?』

……だから俺はカミサマに特別に転生する権利を与えられたのだ。

特典については、“何があっても裏切らない相棒”だけで終わらせ、カミサマと別れた。

渋々、といった感じのカミサマは新しい生を与えてくれ、俺は二次小説お馴染みの……。

“魔法少女リリカルなのは”の世界に転生することになった。

・・・すまんカミサマ。俺は普通の世界にしてくれって言ったはずだぞ？

なんで魔法とかファンタジーな世界なわけ？

魔砲少女が蔓延る世界で生きろって？関わらないようにするにはするが無理じゃね？

転生した俺は赤ん坊スタートという羞恥プレイをしなくて済んだことにまず感謝した。

見た目は幼稚園児くらいだろうか？黒髪黒目の日本人特有の容姿で少しカッコいい程度のルックスである。

誰かに拾われて・・・みたいな展開にはならず、捨て子として判断された俺は施設に送られた。

二次小説では原作キャラの父親や母親に拾われるみたいなのはあるが、普通はない。

むしろ違和感だらけでカミサマが介入したのか？と思う。

施設では特にトラブルなどはなく、年上とも年下とも仲良く暮らすことができた。

カミサマの特典の“何があっても裏切らない相棒”はカミサマ側の不手際でまだ時間がかかるようだ。

お詫びに東方projectのスペルカードを全部送ってきた。

・・・あ、いや。魔力とか妖力ないんだけど俺・・・。

確定。あのカミサマはあかいあくま並のうっかりスキルがあるんだろうよ。

魔力、ねえ・・・俺にもあるのかな？

普通の世界に行きたいと言ったが、やはり魔法は使ってみたい  
と思っっている。

・・・んー、誰か引き取ってくれる人が現れるまでのんびりと過  
ごそうかな？



## 序章第一幕（後書き）

まだ裏切った男が転生するのは知りません。

## 序章第二幕（前書き）

何故だ。ふと浮かんだはずなのにスラスラ進むぞ。

## 序章第二幕

俺が施設に預けられてから二年。  
時間は飛んだが気にしない。

幼稚園児だった俺は小学生になり、施設ではお兄さん扱いにされている。  
通っている小学校は“聖祥学園男子校”である。

・・・うーむ。魔砲少女が通う小学校の横にあるみたいなんだが、助かったな。

二次小説じゃ、同じクラスになったりとかするが、この世界では男子校と女子校に別れるようで助かった。

そして引き取り云々のことだが、同年代のほとんどは誰かに引き取られていった。

ま。俺も誘われたのだが、別の子を推薦して施設に残ったりしている。

いい人か悪い人かは前世の経験でわかるから、親の愛を知らない子に味合わせて上げよう。ってのもあるけど。

だからか、施設の職員には“大人びた子供”という印象を持たれている。

たまに手伝いとかしているからか、職員とは良好な関係を築けている。

で。カミサマからお詫びに送られたスペカだがまっつつつたく役に立たん。

妖力、神力、霊力もない俺に大妖怪や巫女とかのスペカをどう使えと？

あのカミサマ、まさか遊んでんじゃねえよな？

何はともあれ、俺は第二の人生を満喫している。

・・・不満を言えば高校生なのに小学生をやるとか嫌だけど。

精神年齢が違うから付き合いにくいのなんのって。

そして、第二の人生の名前もいつの間にか決まっていた。

西行寺雄志。どうやら手紙に書かれていたらしい。

・・・嫌な予感がするのは気のせいか？

脳裏にぼやぼやした冥界のあの人が振り返る姿が浮かんだぞ。

隣には半人半霊の付き人が疲れたような顔をして・・・げふん。どうやら昼から夢を見てるようだな。うん。

ま。気にしないでゆったりと昼寝をしますかね・・・。

なんだこれは。

12

目が覚めた、いや、無理矢理覚まされたというべきか。  
そんな風に思ってしまった俺は現実が受け止められないといった  
感じに呆然としていた。

まず目に入ったのは赤と黒。

もうもうと立ち込める黒い煙と赤い液体がこびりつく施設・・・  
いや、施設だった場所であった。  
いつの間にか外に出ており、異臭に顔を歪ませながら立ち上がる  
うとする腹に違和感を感じた。

「う、嘘だろおい・・・」

手を触れてみると、そこには施設を支えていたであろう、小さな鉄骨が腹を貫通していた。

それを見ると、口から血が溢れ出し、痛みが遅れてやってきた。

なんだ。なんだこれは！ いったい何が、何が起きたんだ！

腹に刺さる鉄骨に触れながら痛みを耐えていると、どんどん意識が無くなるのを感じた。

血がどンドン流れ出し、鉄骨に伝っていくが、止められずにまた血を吐き出した。

・・・畜生・・・俺が、俺達が何かをしたのかよ・・・。  
なんで・・・新しい人生を歩み始めたのにこんな目に・・・。

「いた！ こっちにいたわよ！」

「！ 早く治療をしないと！」

「わかってる！ わかる？ わかるかしら！？ 返事をして！」

ペシペシと頬を叩かれるのを感じたが、それよりも急速に意識が闇に沈んでいくのが早かった・・・。

力が抜けるのを感じると、頬を叩いていた誰かは慌てたように叫んでいた。



## 序章第二幕（後書き）

次回からは無印・・・かも。

無印とエースはパパッとやって空白期から進めたいと思います。



## 序章第三幕

・・・ここ、は・・・？

気が付けば、俺は白い部屋のベッドに寝かされていた。  
ピッピッピッとなる心電図の電子音を聞きながらポーツとする頭  
で状況を把握する。

確か俺は・・・施設で昼寝をして・・・っ！

「っ、っぐあうえっ・・・！」

止まっていた思考が覚醒するように、あの地獄の光景が一気に頭  
に流れ込んできた。

見るも無惨な姿になった施設、住んでいた子供達や職員の死体・  
・それらが鮮明にはつきりと目に浮かんだ。  
喉から込み上げる吐き気を気合いで押さえつけながら息を整える  
ように落ち着かせようとする。

「あら？ 目が覚めましたか？」

「っ！」

気分が落ち着き始めると、窓側の備え付けの丸椅子に誰かが座っ

ているのが見えた。

その誰かは女性のようで、ぼやぼやした笑顔を俺に向けながら話しかけてきた。

・・・ま、まさかこの人は・・・。

「さ、西行寺幽々子・・・？」

「あらら。私の事はご存じなのね？ なら自己紹介はいらないわね」

「な、なんでここに・・・いつつ・・・！」

物語のキャラクター、東方projectの登場人物である西行寺幽々子を見て混乱する。

驚きすぎて起き上がると、腹と頭が痛み、顔を歪めながら腹を押さえた。

西行寺幽々子はあらあら。とぼやぼやした笑顔のまま、急に起き上がった俺をベッドにゆっくりと寝かせて掛け布団をかけてくれた。

・・・そっいや、腹に鉄骨刺さってたな・・・忘れてた。

だが、なぜ頭まで怪我をしてるんだ？

そんな俺に、西行寺幽々子はゆっくりと、語り出し始めた。

まず、施設の崩壊。あれは爆発事故によって吹き飛ばされたようだ。  
原因は不明だが、爆発の規模が大きいため、現在も警察が捜査を

しているらしい。

そして・・・俺は鉄骨が刺さっており、意識不明の重体で病院に運ばれて治療したらしい。

腹の傷は消えておらず、まだ包帯が巻かれていた。

頭は瓦礫が頭にぶつかったようで、血を流していたみたいだ。

・・・さらに、俺は約二ヶ月半も眠っており、寝ている前は春だったのにもう夏が近い。

「・・・それで、俺以外に生き残った奴は・・・」

「・・・残念だけど、生き残りは貴方だけ。職員も子供達も皆、即死だったわ」

「・・・なんでっ！なんでこんなことに・・・！俺達が何かをしたっていうのか！！」

「落ち着きなさい。傷が開くわよ」

現実を受け止められずに右腕に点滴がささったまま、膝を両手で殴り、シーツを乱暴に掴む。

なんで・・・なんであんないい人達が死ななきゃならないんだ・・・

・！

何かをしたわけでもないのに・・・原因不明の爆発事故とか・・・

！ なんなんだよっ！

自然と溢れる涙を流しながら歯を食いしばりながら死んだ子供達

や職員の人達を思い出す。

皆、優しくかった。入ったばかりの俺を受け入れてくれた。

泣く俺を西行寺幽々子・・・幽々子さんは静かに抱き締めてくれた。

「まず、簡単に説明するわね？」

「・・・・・・・・」

少しだけ落ち着くと、幽々子さんは俺の手を握りながら説明をしてくれた。

カミサマの特典の“何があっても裏切らない相棒”とは幽々子さん達であり、カミサマから俺の世話を頼まれたそうだ。

幻想郷はいいのか。と聞くと退屈な日々から抜け出せると皆が即答したようだ。

・・・カミサマ、誰が女性の相棒を頼んだ・・・。

そして、他にも幻想郷から来た妖怪や人間はいるようだが、戸籍やら住所を探しているようである。

幽々子さんは志願して俺の看病をしてくれ、ずっと一緒にいてくれたみたいだ。

「もうひとつ、貴方に伝えなければならぬことがあります」

「・・・まだ、なにか・・・？」

まだショックから抜け出せてないからか、腑抜けたような返事を  
してしまっ。

だが幽々子さんはぽやぽやした笑顔を浮かべ、頭を撫でながらま  
た話をする。

それは、俺がもっとも認めたくない事実であった・・・。

## 序章第四幕

あの施設の爆発事故から二年。

俺は小学三年生になり、義務教育である小学校に通う毎日を送っている。

だが、爆発事故の影響なのか、黒かった髪は大きな心的ショックにより、色素が抜け落ちて真っ白になってしまった。

他人とは違う髪色が気に入らないのか、学校では毎日虐められている。

教師は見て見ぬフリ。相棒である幽々子達は激昂したが、気にしてないと止めておいた。

カミサマの特典の“何があっても裏切らない相棒”のメンバーには幽々子を加え、幻想郷でも有名な女性がいる。

西行寺幽々子、魂魄妖夢、博麗霊夢、霧雨魔理沙、東風谷早苗がそれに入る。

最初、八雲紫や風見幽香も立候補したが、カミサマ自身が止めたらしい。

・・・何故か全員がねんどろいどみたいになってたけどな。

霊夢と魔理沙は見たことがあるが、早苗や妖夢は初めて見たわ。なのに何故か幽々子だけは元の魅力的なボディのまんまだが。

「ちょっと雄志。あんた何をしてんの？」

「・・・カミサマからもらったスペカを整理してる。多すぎて困る

から

「おうおう。私のマスターパークまであるじゃないか。聞いてたけど驚いたぜ」

ちよつと前に起きた動物病院の爆発事件で学校側は生徒の安全のために臨時休校にした。

・・・おかしい。前世の記憶だつたら動物病院は何か荒らされたり、破壊されるだけのはずなのに爆発？

俺がいるから物語に何か影響が出たのか？

ちよこちよここと歩き回る霊夢と魔理沙にスペカの整理を手伝わせながら思考から抜け出す。

小さな身体に最初は文句を言ってたが、慣れたのか、ねんどろいど生活を満喫する二人。

それぞれが持つ霊力や魔力に妖力を使えば元に戻れるようだが、燃費が悪いからあまり使いたがらない。

「大丈夫ですか？ 少しポーツとしてますが」

「・・・なんでもない。ちよつと考え事だよ」

スペカを整理し終わると、ねんどろいどの早苗が肩に乗って心配そうに声をかけてきた。

幻想郷の住人は空を飛べるみたいで羨ましいものだ。

裏切らない相棒・・・というよりは家族。

霊夢も魔理沙も早苗も俺が頼んで巻き込んだのにも関わらずに、怒らずに一緒にいてくれて嬉しい。

前世では母親がいたが、仕事が忙しくて構ってくれなかったから愛情に飢えているのだろうか・・・。

「あら。今日のご飯は何かしら？」

「ちよつ！ 幽々子様、つまみ食いはやめてください！ 雄志様！ 助けてください！」

「・・・わかった」

爆発事故の影響で精神ココロに大きな傷を負っただけでなく、声も出しづらくなってしまった。

そのせいで髪色と相まってイジメが酷くなっている。

根暗、空気、真つ白白助。これが学校での渾名であり、不名誉な呼び方である。

元のサイズの妖夢は料理をしており、幽々子はつまみ食いをしてパクパクと食べていた。

泣きそうな妖夢の援護に俺はつまみ食いをする幽々子の腰に抱きついた。

「・・・幽々子、駄目。我慢しろ」

「いいじゃないですか。私のお腹が泣いてるんですよ？」



「その前に妖夢が泣いてるじゃない。いい加減にやめなさいよ」

「そうだぜ。私らの飯まで食ってもらっては困るんだぜ」

「・・・早苗、手伝ってあげて」

「わかりました。妖夢さん、手伝います」

「雄志、あんたの尻尾で捕まえときなさい。またつまみ食いされちゃ堪ったもんじゃないわ」

「・・・了解」

台所に集まる全員。

俺は普段は隠している真っ白な尻尾を一本だけ出すと、幽々子の身体に巻き付けて縛った。

・・・尻尾。これが幽々子から聞かされた俺の正体。

前世では母親が大妖怪の九尾の妖狐であり、父親は普通の人間だった。

九尾の妖狐である母親が父親に一目惚れ、禁断の愛を育み、俺が生まれた。

つまりは俺は半人半妖の妖狐。母親譲りの妖力と尻尾があるのだ。

母親は八雲籃とはまた違う九尾の妖狐であつたため、カミサマや八雲紫と交流があつたようで、裏切らない相棒で八雲紫が幽々子達を推薦したらしい。

俺としては、自分が普通の人間ではないから施設の皆は殺された

んじゃないかとずっと悩み、後悔している。

昔から半人半妖の半端者は災いと呼び寄せると言われているから。

自身の白い尻尾に頬擦りする幽々子を見ながら忌々しい。と自分の尻尾を見る。

幽々子や霊夢達は綺麗だと言うが、俺にとっては災厄の証のように思えてならない。

これがあつたから・・・関係ないあの人達を巻き込んだのかと何度も何度も思う。

まだ入院してた頃は酷かった。幽々子から聞かされた日の夜から夢に死んだ子供達や職員が出てくるのだ。

延々とお前のせいで・・・お前がいたから死んだんだ・・・死んで償え。とまさに悪夢だった。

耐えられずに戻し、自殺までしようとしたが、病院に止められたりした。

退院した頃には抜け殻のような毎日を過ごしていた。

学校は行かずに八雲紫が用意した家の部屋に閉じ籠り、ずっと泣いていた。

泣いて、泣いて、泣いて。幽々子達に慰められてやっと最低限の日常生活を送れるようになった。

「んふ〜。モッフモフだわ〜」

今度は俺の尻尾に顔を埋める幽々子。スーッと匂いを嗅ぐように深呼吸していた。

気が付けば、霊夢と魔理沙が頭の上に座って喧嘩をしていた。

これが最近の日常。

俺が欲してやまないものだが、どこかモヤツとする毎日だ。

・・・許される日は来るのだろうか。

原作のジュエルシード事件、通称PT事件は介入はせず、被害があれば直すといった風にしようと話し合った。

今回の動物病院の爆発事件の後始末のように。

## 序章第五幕

プレシア・テスタロッサ。

彼女が起こしたジュエルシードを巡る事件、PT事件。

それはもう終わりも近付き、プレシア・テスタロッサがいる時の庭園の時空の狭間、八雲紫から借りたスキマで覗いている。

『私は行くのよ・・・忘れられた秘境、アルハザートへ！』

『母さん！』

「・・・母親があれば子供は辛いでしょね・・・」

「・・・うん・・・今まで母親のためになるはずなのに裏切られるような結末は救われないな」

今回は護衛に早苗がついてきており、スキマに浮かぶ俺の肩の上に座りながら時の庭園の一室を見ていた。

霊夢と魔理沙は幻想郷の異変を解決するために幻想入りし、幽々子と妖夢は八雲紫と話しているために不在。

スキマで浮かぶにしても、妖力が無ければ無理なのでまだ嫌う自身の白い尻尾を三本出して椅子のように座っている。

九尾の妖狐である母親の遺伝子か、九本の白い尻尾がある。

まだ妖力をコントロール出来ていないため、最大でも四本しか出

せない。

同じ九尾の妖狐の八雲籃から指導は受けているがあまり進んでいないといったところ。

『さあ、行きましようアリシア・・・私とアルハザートへ・・・』

『母さん！ 待って母さん！』

「・・・動きましよう！ 死なせては駄目ですよ雄志さん！」

「・・・いや、誰かが時空に介入してきた」

早苗に言われるまでもなく、助けるつもりだが、誰かがこの時の庭園に転移してきたのがわかった。

場所は時の庭園の彼女達がいる場所ではなく、プレシア・テストロッサが落ちていく、虚数空間の中だった。

来たか・・・前々から予想はしていたが、このタイミングで介入とは馬鹿なのか、頭が回るのか・・・。

前の高町なのはとフェイト・テストロッサのジュエルシード争奪戦では影がチラチラ見えていたが、駆けつけた時には消えていることが多かった。

だからこそ、この場でそいつを、“もう一人の転生者”を見極める。

虚数空間に落ちていくプレシア・テストロッサを追い掛けようとするフェイト・テストロッサを高町なのは達が無理矢理引き上げ、撤退する。

そしてプレシア・テストロッサは自分の娘が入っているポットを抱き締めながらどこか、達成感が溢れる顔をしていた。

「……？ 少しだけ気になるな。」

後でさとり様に頼んで心を覗いてもらおうか？

「！ 来ました！」

「……また、捻りも何も無い……」

『あ、貴方……なぜ虚数空間に！？』

『死ぬよクソババア。俺のフェイトを傷つけやがってよ、そのアリシアだけ渡して一人だけ落ちやがれ』

『……！ アリシアは渡さない！ 貴方のような奴にはね！』

落ちるプレシア・テストロッサの前には銀髪の少年が現れ、金色に輝く鎧を纏いながら虚数空間に浮いていた。

プレシア・テストロッサはポットの自分の娘を庇うように杖を構えるが、咳き込んで上手く構えられないようだ。

「……銀髪、まさかとは思うが目もオッドアイじゃないよな？  
だとしたら痛い転生者って扱いをしなければならぬぞ？」

「……なんか、気持ち悪いです。雄志さん」

「・・・同感」

早苗もこれはないわーみたいな顔をしていた。

なぜ厨二病に犯された奴等は銀髪オツドアイを狙うんだ？オプシヨンでイケメンフェイスとニコポにナデポとか。

あれ、軽い催眠だから本心で付き合えるはずはないのにな・・・。

銀髪の転生者はプレシア・テストロッサに何かを話すと、指を鳴らした。

後ろの空間が歪み、波紋の中心から赤い槍が見えると、そのまま吸い込まれるようにプレシア・テストロッサの心臓に突き刺さる。

「あっ・・・！」

「・・・救わずに殺すか・・・なんて奴だ」

早苗は顔を覆い、心臓に突き刺さる赤い槍から視線を逸らした。

逆に俺は冷静にプレシア・テストロッサに刺さる赤い槍を注意深く観察する。

どうやら前の爆発事故で罪悪感やら人が死ぬ姿に驚かなくなったように、自分に吐き気がしてきた。

・・・あれは間違いなく、刺し穿つ死棘の槍ゲイ・ホルグだな。

真名解放してプレシア・テストロッサを殺したのか・・・。





うとするのが見えた。

逃がすかつ・・・！ 俺の受けた苦しみを・・・味わえ！

「雄志さん！ お願いですから正気を取り戻して！ 憎しみだけで戦っては駄目です！」

「うぐつ・・・グ、ガガガツ・・・！」

母親から貰った九本の白い尻尾がいつの間にか全開になっており、妖力でスキマが軋む音をはつきりと聞いた。

消えかけるあいつを逃がすまいと頭に浮かぶ言霊を叫ぶ。

“ 妖炎狐火 ”

急激に力が抜ける。

早苗は肩から降りて目の前で叫んでいる。

尻尾から狐火が灯るのが見える。

下卑た笑いをするあいつを睨む。

狐火が放たれ、スキマを埋め尽くす。

狐火が消え、視界に金髪の女性が見えた。

「嫌な予感はしてたけどまさか、ね……。暫く眠りなさい」

そんな声を聞くと、ぶつんと意識が闇に沈んだ。

## 序章第六幕

「八雲紫イ！　なんで俺を止めた！　あいつを殺すチャンスだったのに！」

目が覚めると真っ先に寛いでいた八雲紫を突き飛ばして馬乗りになつた。

倒れる八雲紫に掴み掛かるが、本人は涼しげな顔で扇子をパチンと鳴らすとスキマが開き、中から伸びた鎖に捕らえられた。

「落ち着きなさい。貴方、死ぬつもりだったのかしら？　あの時、あそこにいた銀髪の男は貴方以上に強かったわ。力もまだ未熟な貴方が勝てると思つたのかしら？」

「ぐっ！」

「それに、アレは転生の特典とやらをとことん使つてたから妖怪殺しの宝具もあつたでしょう」

あいつが使つていた刺し穿つ死棘の槍ゲイ・ボルグ、あれは間違いなくギルガメッシュの“王の財宝”。

あれには不死殺しの宝具があつたはず。だとすれば妖怪殺しの宝具もある可能性が高い。

それは推理はできたが、それすらも忘れるほど俺は我を失い、暴走しかけた。

・・・ちつ。

「・・・なにやらただならぬ関係のようね。話してくれるかしら？」

鎖に縛られる俺の顎を掬い上げるように八雲紫は扇子で持ち上げる。

彼女の顔は真剣な様子で、目は嘘は許さないと物語っていた。

・・・仕方がない。話すしかないか・・・。

八雲紫が借りた部屋には霊夢、魔理沙、早苗、幽々子、妖夢と八雲紫に従者の八雲藍がねんどろいどモードで座っていた。

・・・八雲紫、あんた楽しんでないか？

藍もねんどろいどになって満更でもない顔をしてるし。

取り敢えず、前世の事から話し、次に殺された時の事も話した。

そして、前世に殺した元親友がああ銀髪の転生者ではないかという事も・・・。

「・・・成程、ね。だからあんなに我を忘れるほど暴走しかけたわけね・・・」

「ああ。憎くて憎くて憎くて堪らないんだ。あいつがいたから人生は狂った。云われもない無実の罪を被せられた被害者の気持ちを理解できるほどにな・・・」

「雄志・・・あんた大丈夫？あんたの妖力がかなり淀んでるわよ？」

ねんどろいどの霊夢に言われると、確かに胸の辺りにもやもやした感じがする。

早苗や妖夢が心配してくれたが、八雲紫はスッと目を細めて俺を見据え、扇子で口元を隠す。

「（・・・間違いないわ。彼の封印が解かれてる。引き金はおそらく負の感情の暴走でしょう・・・参ったわね、これでは力に吞まれてしまう。少し早いけど藍とマンツーマンで修行をさせましょう。彼の母親から頼まれてますものね）」

「・・・？　なんか俺の顔に付いてるのか？」

「おほほ。なんでもありませんわ？　それより虚数空間だったかしら？　あそこで漂うプレシア・テストロッサとやらは救助しておいたわよ」

まさかの発言。

八雲紫と早苗の説明により、状況はだいたい理解した。

刺し穿つ死棘の槍ゲイ・ボルクが刺さっていたプレシア・テストロッサを八雲紫が能力で延命措置を施す。

その後、気絶させた俺を元の身体に戻った早苗が運び、八雲紫はプレシア・テストロッサを八意永琳がいる永遠亭に運んだらしい。

現在、八意永琳が治療をしており、プレシア・テストロッサは一命を取り止めたようで、永遠亭で療養している。

・・・助かった、と言えはいいのだろうか？

最初、刺されたプレシア・テスタロッサを八意先生の所へ連れていく予定だったが、八雲紫が来てくれて手間が省けた。

刺し穿つ死棘の槍は八雲紫がスキマに仕舞っているらしく、コレクションが増えたと喜んでいた。

・・・それにしてもあいつ、能力は“王の財宝”だけなのだろうか？

虚数空間に来る時も、脱出する時もまた別の能力を使っている気がする。

魔法が使えない虚数空間で転移をするにしても、何かしらの能力を使わなければならない。

候補としては、魔法ではない力。魔法とは違う力。もしくは虚数空間の影響を受けない魔法を使っているかに絞られる。

八雲紫のスキマも移動手段に入るが、スキマにはあいつは現れなかったから除外。

・・・考えられるのは“闇の回廊”や“瞬間移動”だな・・・。

どちらにせよ、更なる調査は必要だな。

殺すにしてもあいつの情報が必要だ。足りなすぎる現段階では八雲紫の言う通り、勝ち目はない。

「で。どうするわけ？ 早苗から聞いた銀髪のあいつ、転生者なんでしょ？」

「世界に仇なす者なら消せ、だそうよ。神の役職も大変ねえ・・・」

「・・・つまりは現段階じゃ、様子見をしろと・・・？」

「残念ながら。いくら前世で罪を犯したとしても、殺してもいい理由にはならないそうよ」

「・・・クソツッ！ なんなんだよ・・・なんであいつは許されるんだ・・・！」

ねんどろいどモードの彼女等は暢気にねんどろいどサイズのお茶を啜っていたが、イライラした気分は収まらない。

それに、このもやもやした感じをどうにかして欲しい。頭がイカれそうで、自分がどうにかなってしまいそうだ。

「あ、そうそう。今回は特例で彼は即刻処分を許可されてるわ」

「え・・・」

「つまり、今すぐにでも殺しても構わないってこと。わかる？」

ふよふよと眼前に浮かぶ八雲紫は小さな扇子をコツンと額に当てると、うふふと上品に笑う。

人殺しを許されてるのに、この飄々とした態度ができるのは彼女が大妖怪だからだろうか。

周りを見れば人間の霊夢と魔理沙も普段と変わらぬ様子。早苗は少し顔が歪んでいたが。

冥界の住人である幽々子と妖夢は死んでも構わないような顔をし

てお茶を飲んでいた。

「・・・俺は半人半妖。彼女等のように人が死ぬことに罪悪感を感じなくなるのだろうか・・・？」

そして、人間ではなく妖怪に近付くのだろうか・・・。

「いいのよ」

「・・・八雲、紫・・・？」

「貴方はそれでいい。前世で罪を犯した者を殺すにしても、心を痛めるのは貴方だからこそできる。例え、自分を殺した相手でも」

「お、俺・・・俺は・・・」

「その心は忘れないように。私達は心を痛めるのに人の死を多く見てきたから、痛めたくても痛めないのよ・・・死に慣れすぎたから（・・・）」

「あ・・・」

「そうだ・・・彼女達は長年生きてきた大妖怪に幽霊・・・人の死を腐るほど見てきたんだ・・・。」

だから悲しみたくても悲しめないのか・・・？

いつの間にかねんどろいどモードから元のサイズに戻った八雲紫がゆっくり、ゆっくりと優しく頭を撫でてきた。

それは遠い昔、母親が慈しみを持って撫でてくれた時と同じよう



に、胸が暖かくなった。

・・・母さん・・・。

「んふふふ。可愛いわね。大丈夫よ、私達は貴方を裏切ったりはしないから・・・」

「そうよ。貴方を支えるために私達はいるから」

「ま。退屈しないって理由もあるんだぜ？」

「魔理沙さん、私情ですよそれ・・・」

八雲紫、霊夢、魔理沙、早苗と続き、励ますように声をかけてくれた。

ちよつと涙ぐみながら見ると八雲紫が抱きついてなんかモフモフしてきた。

能力で幻術と現実の境界を弄られ、隠していた尻尾が九本、八雲紫に握られていた。

「あー、藍とはまた違うモフモフ感・・・堪らないわね」

「なに、するんだ」

「あ。悪いわね？ ついでに睡眠欲の境界も弄ったから眠いでしょ？ 暫くはおもち・・・寝ていなさい」

「紫。今、あんたおもちゃって言い……てたわね？」

「うふふ。いいじゃ……。あ、霊夢……る？」

……ヤバい。睡魔が……眠く……なつて……。

次に目が覚めたら八雲紫を殴ろうと決意した瞬間だった。

## 序章第七幕（前書き）

タイトル変えた。

タイトルシリアスなのになんかねー。みたいに言われましたから。

## 序章第七幕

ちよつと早い朝。

俺は防寒対策をきちんとしたコートを着込み、白い髪を隠すようにフードを被っている。

隣には黒い髪の美女、プレシア・テストロッサがコートを同じように着込んで歩いている。

「・・・雄志、ここが？」

「ええ。俺が世話になっていた施設があった場所です・・・ですが、もう跡形もありませんが」

「そう・・・」

八雲紫に無理矢理モフられた次の日に本人の脛を思いつきり蹴っ飛ばしておいた。

紫は足を抱えてリビングの床を転がりまくっていたけど誰も助けようとしなかった。

紫とは話し合い、人生の先輩として尊敬をしている（半分嘘）。紫から呼び捨てにしなさいと言われたため、たまにゆかりんと呼んでいる。

呼んだら無言でスキマに落とされて鬼畜仕様弾幕を受けた。とっ

ても痛かった。

それから休みの間に幻想郷に連れられ、同じ九尾の妖狐である藍から妖力を操る手段と尻尾を使った日常生活の仕方を教わった。

後者は完全にト ビア並に無駄である。

しかも代償に紫に修行終了後に尻尾を強制的におもちやにされるという地獄。

そんな毎日を2ヶ月ほど過ごすと、瀕死のプレシア・テストロッサが完全回復。借りているマンションにやって来た。

紫と幽々子の提案 + 主治医である八意先生の提案により、プレシア・テストロッサはウチに住むことになった。

プレシアさんから話を聞く事になると、前世の知識と変わらない展開を知った。

まず、不治の病に犯されていたが、あいつの刺し穿つ死棘ゲイ・ボルケの槍により、病巣が殺されたようだ。

それから貰かれた心臓は八意先生の治療により完治。

今までは弱っていた身体のリハビリを2ヶ月程で終了。こちらに来たわけである。

さらに、プレシアさんの過去にあった“ヒュードラ事件”というもの。

あれにより、プレシアさんは娘のアリシア・テストロッサを失い、プロジェクトFにより、フェイト・テストロッサを造る。

生まれたばかりのフェイト・テストロッサがアリシア・テストロッサとは違うことに気付き、プレシアさんは絶望した。

アリシア・テストロッサを忘れられないプレシアさんは眉唾物の伝説の都市、“アルハザート”へ行くことを決意。

PT事件、つまりはプレシアさんが主犯となっていた別名、ジュエルシード争奪事件。それを起こした。

後は時の庭園のあの事件に繋がり、現在に至るわけである。

これを聞いた永遠亭の八意先生の助手、鈴仙・優曇華院・イナバは呆れ、八意先生が閻魔である四季映姫・ヤマザナドゥに密告。

プレシアさんに有り難い説教が与えられた。

「うっ……やめてちょうだい。あんな説教はもう嫌よ……」

「はは……自業自得でしょ」

「……そう言われると何も反論できないわ。確かに、私はどうかしてたわ。アリシアはアリシア、フェイトはフェイト……なんでわからなかったのかしら？」

「……失ってからこそ気付くことはありますよ。大事な今は今からですよプレシアさん」

「……そう、ね」

弱っていた身体も完全回復したプレシアさんと俺が世話になっていた施設に来てるわけだが。

大規模な爆発だったため、遊具などがあつた場所も含めて更地になつており、施設の建物があつた場所には誰かが持つてきたであろう花束が供えられていた。

買つておいた花束をプレシアさんがその隣に供えると、俺と手を合わせて黙祷をした。

爆発事故の日から毎日のように俺は施設に花束を供えている。  
罪滅ぼしとか、許されたいからとかではなく、ただ純粹に供養を  
したいからしている。

前に受けた映姫様の説教でどうすればいいかを問えば、貴方はそ  
の人達を殺したわけではない。との言葉を戴いた。

それでも、自分が半人半妖だからあの人達を巻き込んだのではな  
いのかと思い、延々と悩んでいた。

『・・・はあ。いいですか？ 半人半妖だからと言って災い呼び  
寄せるわけではありません。それはただの迷信であり、遠い過去の  
忌むべき習慣です。さらに、半人半妖だからといって災い呼び寄  
せるのであれば、貴方の知る守護者の上白沢慧音も同じような事にな  
りますよ？ 貴方は会ったことがあるはずです。そして、どう思  
いましたか？ 人里の人達はどうか、貴方の目に写りましたか？ 幸  
せそうでしたか？ 皆さんは不幸そうに見えたのですか？ 彼女は  
貴方のように半人半妖である事を悲観していましたか？ ・・・貴  
方が思ったことが、答えです』

『映姫様・・・』

『・・・それにしても、貴方だけですな。私の話をしっかりと聞い  
てくれる方は。小町も他の方もいつもいつも逃げたり・・・ブ  
ツブツ・・・』

『え、映姫様。話なら俺が聞きますから！ そんなに落ち込まない  
てください！』

・・・その後、映姫様から説教というか愚痴を聞かされたな・・・  
。 やれ部下の小町がまたサボっただけの、書類が多すぎて休む暇がないだの、胸が小さくて嫌になるだのと完全に普段の愚痴だった。

まあ、映姫様のお話で若干、悩みは解決してきたが、やはり根本的などころはまだ解決できてない。

答えを探すために、こうして供養に来ているのだ。

あれから二年が過ぎてるが、まだ原因がまだわかっておらず、警察の捜査も打ち切られてしまった。

独自に調べていっても、どうもただのガス爆発による事故ではないと判明するのだ。

今までの調査には紫や幽々子、霊夢達も協力してくれており、何か、別の原因で起きたのでは？ と紫は睨んでおり、まだ調査を続けている。

「あら、雄志。またお参りかしら？」

「紫」

「紫さん」

黙祷を終えると、紫がスキマから上半身だけ出してこちらを見ているのが見えた。

プレシアさんも紫を見て驚くも、すぐに挨拶をした。俺は慣れたから驚かないがな。



「緊急事態よ。魔理沙がこの街に魔力反応を感知したらしいわ。どうやら魔導士が動いているようよ」

「・・・高町、なのはか・・・」

「いいえ。魔理沙は七つの魔力を感じたようよ、高町なのはとやらだけじゃないみたい」

「七つの魔力・・・待て。今日は確か・・・そうかつ！ 闇の書か！」

忘れていた。今日は原作でいう闇の書事件の始まり、高町なのはが魔力を蒐集される日かつ！

だとすれば闇の書の守護騎士、ヴォルケンリッターもそこにいるはず！

どうする・・・？ 今から介入して得られるメリットはあるのか・・・？

管理局側。協力をしてでも連行される可能性が高い。

半人半妖の俺はまさに管理局の裏の格好の餌食になるだろう。

恐らくは・・・あいつも管理局側にいそうだから却下だな。

ヴォルケンリッター、つまりは闇の書側。

・・・駄目だ。どうシミュレートしてもメリットは得られない。

闇の書の主である八神はやたと接触する？ 見ず知らずの俺と会っても警戒されるのがオチ。

ヴォルケンリッターを援護？ 未知なる妖力を宿す俺では、裏切

られる可能性が高い。彼女等は八神はやてを助けるためならなんでもしそつだからな……。

……どちらについてもメリットは皆無。ならば……。

「中立、かしら？ 互いの手札を見極めつつ、闇の書とやらをどうするかは主である八神はやての人格を踏まえて決める、ということかしら？」

「……さすが紫。すぐに考え付いたな」

「伊達に年月は重ねてないわ」

「それ、暗に自分が年増だと認めてるぞ」

「……」

「いたっ！ 無言で扇子で頭を叩くな！ 言ったのはお前だろっに！」

方針は管理局にも、ヴォルケンリッターにも付かず状況を見極める中立をする事になった。

あわよくば、あいつの謎に包まれた他の能力も知りたい。

……できれば彼女、闇の書の管制人格である後の初代リインフォースは助けてやりたいな……。

紫に涙目で叩かれながらプレシアさんとスキマに入り、一時帰還することにした。



## 序章第八幕

・・・まさか、ここまで予想通りとは呆れたものだな・・・。

「ないわー。あれはないわー」

「・・・紫、キャラが違う。戻して戻して」

「気持ちはわかるけどね。魔理沙、あんたはどうなのよ？」

「まさに猪だぜ。巨大な魔力に身を任せて無理矢理使っている感じがするぜ」

一旦、家であるマンションの一室に帰ると、プレシアさんは闇の書を調べると離脱。

スキマを使う紫と留守番していた霊夢と魔理沙が興味津々とはかりについてきた。

現在はスキマから高町なのは一同とヴォルケンリッターが戦うのを観察している。

高町なのは、つまりは管理局側は高町なのは、フェイト・テストロツサ、彼女に似た恐らくはアリシア・テストロツサ、ユーノ・スクライア、テストロツサの使い魔のアルフ。

ヴォルケンリッターはシグナム、ヴィータ、ザフィーラ、離れた場所にシャマルが見えた。

そして、あいつは……。

『ははははははっ！　これが俺の力だ！　ひれ伏すがいい！』

「王の財宝”に加えて千の雷キリブル・アストラペーか……厨二の転生者のお決まりのパターンだな」

「き、きーり？」

「千の雷キリブル・アストラペー。前世の漫画の魔法だよ」

……だが厄介だな。テンプレの特典といえども、ネギま！の魔法は侮れない。

千の雷キリブル・アストラペーや古代語呪文は下手すれば大地を破壊する事が可能だ。特に闇の魔法マギア・エレヘアなんぞ使われたら速さでは勝ち目はないな。

ネギま！の薬味少年の切り札とも言えるドーピング魔法。魔法が豊富であれば戦略の幅は大きく広がり、余計に手が出せなくなる。

……どうするべきか……今ならまだ経験が浅いから経験豊富な幽香や勇儀、萃香ならギリギリで倒せるだろうか……？

モフッ、モフモフ。

いや。まだ危険だ。“王の財宝”もそうだし、女性限定の魅了魔

法も使えないとは限らない。

考えれば考えるほどまだ調査をしなければならぬと結果が出る。

モフツ、モフモフ、モフモフモフ。

・・・一番厄介なパターンは転生者テンプレ特典の“直死の魔眼”だな。

あれなら不老不死であろうと、殺せてしまつから紫達でも勝てないかもしれ・・・。

モフツ、モフモフ、モフモフモフ、モフモフモフモフモフモフモフ！

・・・。。。

「あのお。さつきから何をやってるの？」

「んー？ あなたの尻尾をモフってるのよ。これ、干したての布団よりフカフカするわね」

「でしょー？ 藍よりもモフモフするから病みつきになっちゃったわ」

「おおっふ・・・こりゃ堪んないぜ・・・」

「・・・俺の尻尾なんだけど・・・」

スキマで浮かぶために自分の尻尾を出し、妖力で浮いているのだが、四本のうちの三本を三人にいいようにされてる。

霊夢は自分の能力で浮いてたが、飽きたのか俺の尻尾を椅子代わりにして座り、モフモフ。

紫はスキマを操るから浮いたままで尻尾に顔を埋めてモフモフ。

魔理沙は尻尾をマフラーのように身体に巻き、戦闘を観戦。

・・・もういいや。諦めて少しでも情報を収集しよう。

「・・・ねえ魔理沙。お前も魔力を使うだろ？ あいつらを見てどう思う？」

「んー？ 私から言わせればあれは魔法なんかじゃない。ただ、でばいす？とかいうやつで無理矢理魔法らしくして発動させる科学みたいなもんだぜ。まだパチュリーの方が魔法と言える感じはするぜ・・・」

「そう・・・ならあいつは？」

「さつきも言ったが、アレは無理矢理魔力に身を任せて使っているだけだぜ？ もう少し魔法陣やらを改良するなりするべきだと私は思うぜ」

魔理沙からは酷評だな、あいつ。

確かに、あいつを見るとネギま！のバグキャラの一人、ナギ・スプリングフィールドのように無理矢理魔法を使っている印象があ

る。

たぶん、まだ魔法を手に入れて浮かれているんだらうよ。

……だが、大体は推理できそうだな。あいつの能力は。

「あ。結界が破れたわね……」

「うおえつ、あのヴォルケンリッターとかいうのにウィンクしてやるぜ。あの野郎」

「ピンク色の剣士が嫌そうな顔をしてるわよ」

「……取り敢えず、帰ろうか。情報を纏めないと……」

あいつは中立のような立場で場を乱すだけ乱してから結界を破壊し、高町なのはを支えながら何処かへ消える。

去り際にヴォルケンリッターにウィンクするという気持ち悪いオマケつきで。

顔はいいから似合うだろうが、欲望が駄々漏れで嫌悪感しか感じられないものになっていた。

霊夢、魔理沙、紫は気持ちわるっと連呼しており、紫が開いたスキマの出口にある家に踏み込んだ。

そこには買い物帰りの早苗、妖夢が冷蔵庫に買ってきたものを入れていた。

「あ。お帰りなさい雄志さん」



「うん」

「何かありましたか？ 紫様から少し聞きましたが、戦闘があったそうですね？」

「まあ・・・なあ？」

魔理沙が言いにくそうに答えると霊夢と紫は聞きたくないとはかり、テレビを見て現実逃避をしていた。

妖夢は様子がおかしいことに首を傾げていたため、説明をすることにした。

彼女の仕えてる主である幽々子は炬燵で溶けるようにまったりとしており、蜜柑をもっしやもっしや食べていた。

妖夢に全てを話してみれば。

早苗と苦虫を潰したような顔をしてお茶を飲んだ。

・・・いや、気持ちはわかるがファンが見たら発狂するような顔はやめた方が・・・。

「と、ところで雄志？ ふ、フェイトは・・・アリシアは元気だったかしら？」

「ええ。見た感じでは元気でしたけど？ アリシアさんなんかはデバイスを使って戦っていましたよ」

「ただど気になる事があるんだよな。アリシアはフェイトとでも  
もいなくても、あいつを心の支えのように慕う感じがしたんだ。  
・・・たぶん原作でいう、弱った心につけこまれたのかもしれない。  
い。」

「母親が褒めてくれない、頑張っても頑張っても無駄なのでは？と  
感じた頃にあいつが褒めたら効果は火を見るより明らか。」

「間違いないと落ちるだろう・・・。」

「高町なのはも似たような印象があったから、孤独の心につけこま  
れたのかもしれないな。」

「・・・さて。状況は限りなくヤバい事になってきたな。」

「原作の主人公である二人を殺してしまえばどうなるかわからない。」

「あいつに依存した二人を解放するにしても、生半可なものでは無  
理かもしれない・・・。」

「うーん・・・。無理矢理なら半人半妖の九尾の妖狐である俺の強  
力な幻術で催眠を解くか？」

「いや、対象がいなければ無理だし、あまりこういうのはしたくな  
い。」

「うむむむ・・・。」

「・・・なんか真剣に考えてるわねえ・・・。」

「ですね。暫くはそっとしておきましょう。私と妖夢さんは作って  
おいた夕飯を温めますから。」

そんな風に約二時間を潰した俺だった。

「・・・」

「どうしたシグナム？ さっきから難しい顔してるじゃねえか」

「ヴェータ・・・いや、お前は感じなかったのか？」

今日の戦闘で白い少女からリンカーコアを蒐集できたのはいいが、気になることがある。

姿が見えなかったが、誰かから視線を送られているのを感じた。

・・・こう、観察されている感じが強かったな・・・。

まさか、主はやての闇の書を狙う輩か？ とは思ったが、視線は私達だけでなく、相手のあの少女達も観察していた。

主に、銀髪の青と黄色の瞳を持つ魔導士を見ていたと思う。

そして、少なからずの敵意と殺意もあの魔導士に向けられているのもわかった。

あの魔導士は気付いていないみたいだが、間違いなく私達より強い可能性がある。

魔力とは別に、巨大な何かを宿す何者か……。

「？ なにがだ？」

「……いや、いい。私の思い過ごしかもしれませんが。忘れてくれ」

だとしても、私達は負けるわけにはいかない……負けは主はやての死と繋がるのだから……。

ヴォルケンリッターが長、烈火の将、剣の騎士、シグナム。

主はやてだけは……救ってみせる！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9642z/>

---

半人半妖とテンプレチートと魔法少女な世界

2012年1月4日09時48分発行